

幼稚園における障害幼児の集団適応の研究(その7)

— 障害幼児研究におけるミクロ分析の方法 —

○平岩定法・赤塚大樹 斎藤美代子・山口延子・小島恵美代・伊藤洋子・加藤道子
(中京女子大学) (中京女子大学附属幼稚園)

【研究の目的】

我々は、昭和57、58年度と保育学会において、障害幼児保育実践の検討を報告してきた。今回は、1つのまとめとして、我々の研究グループの研究手法論である「ミクロ分析法」について、その内容をまとめ、事例分析を報告して、まとめをしたい。

【研究の内容・方法】

A. ミクロ分析とは

保育者の実践記録をもとに、その内容を徹視的に、集団で分析・討議・再表現して、保育者の自己教育・自己反省を促す方法である。

日々の保育実践で、保育者が気づかず見逃している保育事実を、実践記録をまとめることにより、見逃している事実を明らかにし、有力な自己反省の機会をつくることになる。しかし、実践記録が生きて働くためには、記録を、自分ひとりのもの(日記)とするのではなく、みんな(集団)で、その記録を討議することにより、その実践内容を深く分析し、保育者の保育観・子ども観を深くとらえ直す機会とするものである。

ひとりの記録は、あくまで個人の評価、価値で、保育をみつめている。ある事例のとらえ方も、発達観も、これしかないというきめつけで、見ている場合が多い。

これに対し、ミクロ分析は、この独断と偏見を排し、集団(グループ)で、その実践記録を読みあい、記録者の保育観を問いただすのみでなく、討論・参加者全員の保育観、幼児観を問い直す機会とするものである。

B. ミクロ分析のための実践記録の書き方

(1). 実践記録は、保育者の生の感情を包みこんだ記録が望ましい。

日々の保育者としての悩み、苦しみ、子どもとの取りくみ、他の保育者とのやりとり、親との交流など、生の感情を出すものがあってよい。

(2). 日々の記録の一部(10分間~30分間)を資料として提出する。

この場合の資料は、日々残している記録を、ありのままに、書き改めることなく提出する方がよい。後から資料を出す場合、つけたして書く場合があるが、当時のままの方がよい。

(3). 単なる観察記録ではよくない。

第三者的、客観的記述でなく、保育者と子どものかかわりが正面に出たものがない。とすると、飾って書きたくなるが、討論過程の中で、いつわりの部分は、はげ落ちるので、ありのままの記述が望ましいのである。

(4). 討議資料用としての量は B4紙一枚か、B5紙一枚程度でよい。

実践記録としては、できるだけ詳細にわたることが望ましいが、討議過程では、その一部でよく、一時間から二時間の討議時間であれば、B4紙の分量で十分である。

(5). 書く視点は、研究会の性格、目的で、視点が変わるが、視点にこだわらず、ありのままに書くことができるという。

その研究会の性格により、書く記録の視点が、若干ずれる。その視点にそって、まとめられれば、研究会として、討議しやすいが、絶対的条件ではない。視点からはずれていても、十分に討議になりうる。

C. ミクロ分析による資料の集団討議過程

(1). 討議参加者の相互信頼が基本である。

このミクロ分析の方法が、成立する前提は、研究グループ(集団)内の各メンバーの間に、相互信頼関係が成立していることである。

こと細かく分析していく場合に、これらがあげ足とりと理解された場合には、感情的マサツが生じ、研究会が成り立たない。従って、研究会内部の民主主義が成立してこそ、成果を生み出す方法である。

(2). 原資料にもとづく文章の検討

①文章を読み合わせ、疑問と思う所から、記録提供者に質問していく。

②提供者は、その質問に答えていく。

③第三者(助言者)が存在する場合には、客観的に整理していく。

④質問が出てこなくなるまで、質疑を重ねていく。その間に、文章全体が浮きぼりにされ、資料の実践の是非が検討され、実践者の保育観、幼児観が掘り下げられていく。

⑤その間、提供者にとって、きわめてあいまいな記述の個所が、いくつも指摘され、その都度、回

想しながら、その間の事情を整理し、空白部分、あいまい部分をうめていく。

⑥司会者は、その間の討議状況をふまえ、その過程を図式化・構造化していく。

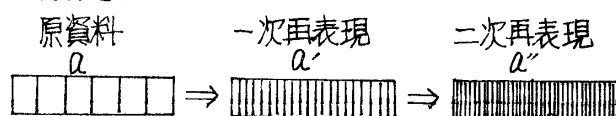
⑦きわめて短時間の実践記録であっても(10分間～30分間)、それをつめていくと、全体の活動内容を問い直すことになり、全体の構造を把握し直す機会となりうる。

⑧全体の構造をつかみ直す中で、その実践記録の一部が逆照射され、その間の保育者の行動、保育観が洗い直され、新しい反省と自覚が生れる。

⑨集団討議(複数の目)は 確かな保障である。独断と偏見を排し、集団成員の保育観の洗い直し・深化となる。

⑩徹底したミクロな分析が真隨である。短い文章を徹底的に、微細に分析しつくす討議が重要である。

徹底した微積分により、保育者の目、教育技法、指導観がゆさぶられ、保育観の自己変革へとつながる。



D. 記録の再構成による提出

①討議された部分について、再度書き直し(第二次)討議資料として提出する。

②分量的には、第一次に比べ、かなり増加し、きめ細かい文章となりうる。

③何を書き、何を落していたが、明白となり保育者の保育観をゆさぶる。

④実践のミクロ分析は マクロな保育計画の見通しと相関する。

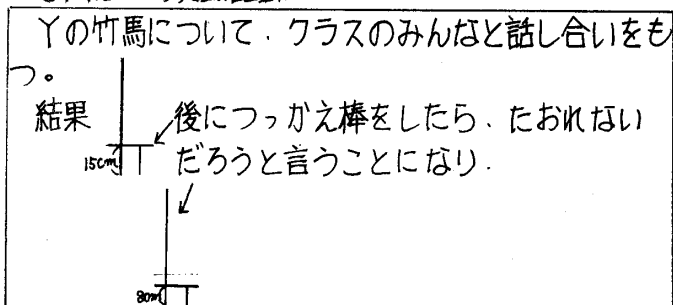
E. 障害幼児をとらえるための方法

ミクロ分析の方法が、障害幼児研究に意味をもつのは、わずかな変化、発達を可能ながぎり、見逃すことなく把握しようとする方法論だからである。これは、全体の中の一部を抽出することにより、全体の傾向を探り、微視的变化を探求する方法である。抽出部分により、問題把握に若干の差が出るが、基本的には、いかなる部分からも、学ぶことは可能である。ミクロ分析こそが、障害幼児の発達の可能性を探り、教育技法を発見する最適な方法の一つである。

ミクロ分析による事例分析の例

山口実践の第一回の記述

6月13日の実践記録



↓ (討議をふまえて)

第二回目の同一部分の記述

Yの竹馬について、クラスで話し合う。
Yだけ合格してないけど どうしようかと相談をもちかける。

C. 「もっと練習したら」

C. 「前をちゃんと見ない」

C. 「三輪車の方が好きだよ」

C. 「Y君は、すぐ落ちちゃうもん」

先、「今まで、練習をしたけど、どうしても後にたおれちゃうの」

C. 「後を(背)押えてやれば」

C. 「後を押えてやると、自分の手で竹を持つことをしないで、うでで持とうとして、竹に寄りかかってしまい歩かないの」

(なかなか いい案がうかばない)

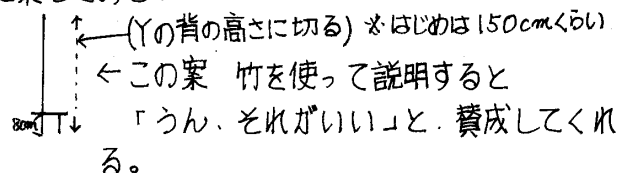
M. 「おっこちないように こうやったら」と自分の両手を出して説明するが みんなに解らない。

T. 「つかいばうしたら」と言い出す。

「どこに？」と聞くと「もう1本の竹を持ってきてくっつけるのだ」と言う。

使える案は子どもたちからは 出なかったが、なんとかYもできるように…と願う思いは持っていた。

私から「こうゆうふうにしたら どうだろう」と提案してみる。



結果、「やってみよう」ということになった。